

教育と公益

— 新たな社会システムの構築のために —

門脇 道雄

一、文明という逆説

今ここにある危機とは、何だろう。なかでも、都市国家の発生がそれに因つてきたところの文明の逆説、すなわち、進歩が退歩である可能性が引き起こす危機は、最大級のものではないだろうか。進展とは前に進むことであるとき、そのたびに後退してゆくならば、私たちは歩む道を間違えているばかりではない。歩む行為それ自体が誤っていることになる。なぜなら、歩んでいる道が、秩序よりは混沌、生成よりは破壊、便利よりは不便、安全よりは危険に向かう道である可能性があるからだ。

地球四十六億年の歴史を一年に圧縮すると、二月下旬

に最初の生命が海で誕生して以来、十二月最初に陸上動物が現れ、十日に恐竜が誕生し、二十七日の夜中に絶滅すると、翌日の早朝、哺乳動物のなから霊長類が姿を現し、三十日午後九時から二足歩行を始め、大晦日の午後六時に人類直系の祖先が東アフリカの草原に出現したという。そして、大晦日の終わる四〇秒前、旧大陸に四大文明が生まれ、一秒前に科学技術による大量生産が始まり、〇・三秒前に環境破壊が起こったのだという。

二十世紀は、進歩においても破壊においても、規模の大きい世紀だった。二度の世界大戦とその後の冷戦。その終結に伴う宗教及び民族間による地域紛争。ソ連チェルノブイリの原子力発電事故に代表される、技術革新という神話の崩壊。地球温暖化、環境ホルモン、エネルギー

危機などの環境問題。AIDSの蔓延と恐怖。地震などによる天災や凶悪犯罪などの人災への無力。二十世紀に起こった負の遺産は、二十一世紀に入ってからも払拭される様子はない。米国同時多発テロ、イスラエル紛争、イラク戦争、北朝鮮の脅威。破壊や恐怖の度合いがこれまでのどの世紀よりも大きいばかりでなく、脅威を克服する「国際政治」の導入がさらなる脅威を生んで取り返しがつかないかのようだ。

文明社会における具体的で目に見える矛盾、たとえば、科学技術（技術が連続して生まれるのは、それ以前の技術が、必然的に次の技術を生まざるをえないように仕向けられているからだ^①）というジャック・エリュールの言説を引いて、〈世界がいよいよ無秩序化されていくのは、新たな、ますます複雑なテクノロジーを応用して問題解決に当たろうとしているからである^②〉とジェレミー・リフキンは『エントロピーの法則』のなかで述べている。テクノロジーの進展を止めることはできない。なぜなら、プラスと同時に生じるマイナスを克服するために、さらなるテクノロジーが導入されねばならないからであり、

それはさらなるマイナスを生んで、次なるテクノロジーを待たねばならないからだ。したがって、〈技術という「麻薬」のエスカレーションは、生命にとつても、また地球にとつても、破滅に至る片道切符を意味することではない^③〉。

生物の一生がそうであるように、成熟が死へと帰結するならば、文明もまたそうであり、私たちはなす術なく、終末を迎えるしかないのだろうか。そうとすれば、人間という類の叡知というものは、どこへ行ったのか。生き延びる意志があるのなら、私たちは今、歩んでいる道とは別の道を新たに見いださねばならないのではないか。

一、機能体の共同体化

阪神大震災・「もんじゅ・ふげん」動燃事故による安全性の崩壊。オウム真理教事件・酒鬼薔薇事件・和歌山毒カレー事件・伝言ダイヤル事件・日野小二男児殺害事件・池田小児童殺傷事件・新潟少女監禁事件・長崎市幼稚園児殺害事件・東京都小学六年女子児童赤坂マンション監

禁事件などによる心の崩壊。薬害エイズ問題・住専処理問題・億単位カラ出張事件・神奈川県警新潟県警虚偽報告問題などにおける行政の腐敗。総会屋への利益供与及び巨額融資を行った金融業界（野村証券、第一勧銀などの腐敗。一三万人を超える小中学生の不登校・一〇万人を超える高校生の中退・いじめ・学級崩壊・非行や犯罪の増加など教育の崩壊。——ここ数年における事件や事象が引き起こした崩壊の実態は、何を物語るのか。

銀行・生命保険・証券会社などの破綻、大手及び中小企業におけるリストラ、株価の下落、官僚や政治家の不祥事と無責任、青少年による犯罪の多発とモラルハザード、三万人を越す自殺者、戦争責任の解釈——「失われた十年」のあと二十一世紀に入っても、問題解決への道程は険しい。そして、改革が叫ばれ、「構造改革」という言葉が聞かれない日はない。しかし、それは今に始まったことではない。改革はすでに何年も前に議論され提唱されているにもかかわらず、何もほとんど変わらない。十年前の新聞の社説を読み返してみるといい。現在と変わらぬ提言が認められるはずだ。それは、なぜか。

それを考える前に、考察すべき一事がある。よく知られるように、日本のほとんどあらゆる組織が機能不全に陥っていることである。機能体であるべき組織が機能していないからだ。機能しないのは、機能体が共同体化して、組織の目的が本来の目的から逸脱していくからである。確かに、新たな法律や制度が次々に導入されてはいらぬ。しかし、それらは「建前」として「本音」の背後へと追いやられてしまう。

解剖学者の養老孟司は「共同体化は国民の性癖」という見出しで、次のように書いている。

医学に関係した社会的な重大事件について、これまで医師会がどういうふう「機能してきた」か、だれかなにか思いつくだろうか。もちろん診療報酬については、徹底的に意見をいつてきたと思う。その意味では医師会は経済団体であろう。それ以外に医師会はなにか社会的に発言したか。遠くは水俣病から、スモン、サリドマイド、近くは臓器移植、血友病エイズ問題、らい病予防法にいたるまで、医師会の意見はどうなのか。³

〈医師会〉ばかりが〈経済団体〉であるのではない。会社、大学は言うまでもなく、政治という派閥や官庁、特殊法人はどうなのか。〈医師会〉はなにか社会的に発言したか。〈医師会〉を、学校、教員、公務員、などと言い換えてみるがいい。

一国が掲げる主義は厳密な二分法によつて規定されるものではないが、たとえば次のような対立項目を考慮すると浮かび上がってくる真理がある。「国家主義——民主主義」「社会主義——資本主義」「全体主義——個人主義」。表面上は後者を標榜してはいても、事実上は前者のような体制になつてはいないだろうか。「護送船団方式」「日本株式会社」「政・官・財の癒着の構造」などの病理は、それを証しているように思われる。新たな法律や制度がそうであるように、後者は「建前」として前者の「本音」の背後に追いやられる。つまり問題は、集団や共同体の論理が個や機能体の論理を押しつぶしてしまふことである。たとえば、「個人主義」に似た「自分主義」が横行している。我が国の人々の公共心の欠如はそこに起因するが、利己主義そのものに問題があるという

よりは、個人主義の生まれる土壌が貧弱であることにこそ問題はあると言える。

どうしたらいいのか。答はそう難しくはない。組織を機能体たらしめることである。具体的には、もたれあう集団の解体であり、自立した個人の育成である。したがつて、構造改革とは、政治の問題というよりはむしろ、われわれの問題である。つまるところ、構造改革とは、すべての国民の意識改革である。

三、システムの病根

英語にBROTHERという語がある。それは、兄でも弟でもない。兄はOLDER BROTHER、弟はYOUNGER BROTHERと表しうるが、日常あまり用いられるわけではない。それに、日本で「きょうだい」と言えば、兄弟・姉妹の両方を意味しうるが、そんなニュアンスを持った語が英語にあるわけでもない。

英語では長幼の順序を問題にすることはあまりないが、兄・弟・姉・妹と、年上・年下の関係を明示しながら、

それを推し進める傾向が日本社会にはある。「だんご3兄弟」という歌が流行ったのも、近年のことだ。日本社会は、上下関係という仕組みを特質として持っていると言える。

年功序列という仕組みや、先輩・後輩などという区別もまた、日本社会に特有のものである。これら上下を区別する思考形態は日本人の無意識に深く根づいていると言えるが、昨今の日本システムの制度疲労を考える場合には、有効な材料を提供してくれる。

年齢という観点だけで、下の者が上の者に仕え敬うというありようには、有無を言わさぬところがある。それは上位下達という命令系統へと通じており、服従と隷属の関係が初めから結ばれている。こうして、下の者は言動を監視され、勝手な振る舞いは禁じられる。この国に議論が沸き起こらないのはそのせいだ。

総会屋事件は企業トップの横並び体質をあらわにしたが、おしなべて犯罪を防ぎえないシステムは、この国の弱点を明らかにした。上層部がまちがっている、下層部から提言することができない。それに、このシステム

の上にいる者には責任がない。なぜなら、上下関係そのものは、上層部の者が自ら望んだありようではないからだ。上の者も組織に埋没している。それに、個がないから、自己責任などというものはない。あるのは、誰もが自らは糾弾しえない病理であり、他から追求されることのない病根である。

その象徴的な出来事は、たとえば警察法第五条で「国の公安に係わる警察運営をつかさどる」と規定されているはずの国家公安委員会の持ち回り決裁である。システムが空洞化しているのに、それを糾弾する動きが国民の間には起こらない。それを第二の空洞と言っているが、この真空状態そのものが政治的説明責任を担うべき中枢の欠落を限りなく許してしまっている。つまり、国家公安委員会がもたれあう仲良し集団になっているのを、誰もどうすることもできない。なぜなら、誰もが何らかの組織に所属しており、日本社会そのものが兄弟愛に満ちた仲良し集団であるからだ。

流れが双方向ではなく、一方向であること。全員一致して同一行動を取らせること。事を荒だてる気風が押さ

えられ、上下関係にすべての者を組み入れること。これらが、日本というシステムを強化する。

上に提言することができない社会は、物言わぬ社会であり、依存している社会であり、無関心・無関係を装う社会である。欧米の個人主義とは対照的に、「みんなदैいつしよ」「心をひとつに」を合言葉にしながらも、個人個人は別のことを考えている。逆説めくが、集団に寄与しない集団主義をこの国はせつせと推し進めている。集団の綻びを是正するため、団結・友愛の教育がますます強化され導入される。それはねじれをあらわにするだろう。しかしながら、システムの綻びは、システム自体が保有する治癒力をあてにすればいい。それがシステムの原理であり、同時に病根である。

四、「和」という幻想

雪印・丸紅畜産などの食品業界における食品偽装表示事件、外務省のNGO参加拒否問題、中学生による集団ホームレス傷害致死事件（東京都東村山市）などの出来

事からは、時代を象徴して臭ってくる悪臭のようなものがある。これらに共通に巣くっている病弊のひとつは、一人ひとりの個人ではなく組織やグループという形態が威力を発揮しうる力学である。これらのどのケースにも当てはまるのは、自分の属する組織・集団には逆らわないことを優先する行動様式である。「組織ぐるみ／ハンイズム」という腐敗のキーワードがそこから引き出されるが、その裏側に張りついているのは「滅私」という影の力学である。つまり、個人が集団のなかにはおらず、集団に理非善悪の判断力はない。我が国に個人主義はなく、代わりにミーイズム (Meism)／自分主義 がはびこっているのは、そのせいである。

自己中心的な発想から遠く離れて、他者の総体、公共の利益 (公益) へとつながりうる個人主義 (Individualism)／個体主義 が、異なる立場の他者を受け容れないミーイズムに取って代えられたのは、個人主義という理念を排除する原理が働いていたからである。それが、「十七条憲法」で強調された聖徳太子の時代からの「和」ではなかったか。政治・経済・社会システムの全面的な機能不全は、シ

システムに巣くった病であると同時に、システムによって謀られていたものである。システムは、個別化や多様化を志向するのではなく、統合化および画一化をめざしていた当のものである可能性が高い。システムの腐敗はシステムそれ自体の原理からもたらされていると考えられるのは、そのせいだ。現状の打開は改革につながるものであるが、システムは現状を維持しようとするだろう。システムとは、自己防御が自らの存在意義であるからだ。システムが正常に働いているときは、それでいい。異常に働いているときでさえ異常を維持するところに、システムがシステムである根拠がある。チェック機能を、システム自らは持ちえないからである。

社会の混迷を振りほどくには政治と教育が原動力となるべきであるのに、残念ながら、この国では政治も教育も空洞化してしまっている。その原因のひとつは、目的と手段の取り違えである。選挙と受験に象徴的であるように、政治が選挙活動に収束し、教育が受験教育に収束してゆく現状にあつては、政治も教育もその目標にたどりつくことはありえない。当選と合格は、物事を始める

ための手段であるべきなのに、目的と化しており、スタートであるべき出発地点がゴールという終着地点になっているからだ。

バブル経済崩壊後の「失われた十年」、政府による総括的反省も国民からの批判の声も、その盛り上がりに欠けている。集票や点数という数の論理が通ってしまうならば、議論や検討を自動的に排除する仕組みに無意志的に従っている状態それ自体が、社会システムの全面的機能不全を支えていると考えられる。そして、実は、国民の政治への無関心は、教育が推し進めているふしがある。優秀な生徒たちが《進学校》という学校に集められ、熾烈な受験勉強に向かわせられ、たどり着いた大学がレジャーランドであるならば、知的資産の国家的損失は莫大なものになるはずだ。しかしながら、そういう状況をこそ、社会自体が誘導してしまっているきらいがある。つまり、政治家が政治に関わらず、児童生徒が社会から遠ざけられて育成されてゆくならば、そこには純粹培養化されるマインドコントロールがあるだけで、政治や教育はありえず、ただ政治や教育を空洞化する舵取りのい

ない国家的計略のあいまいな雰囲気があるにすぎない。「和」は謀られている。議論のない曖昧な雰囲気が社会を動かす力学こそ、「和」という理念によつて誘発されてきたのではなかったか。

「昭和恐慌」に比肩するバブル崩壊がもたらした社会変動を、鳥羽欽一郎・早稲田大学名誉教授は、「日本型社会システムの崩壊」であるとして、具体的には、〈年功序列・終身雇用といった日本の経営システム、地盤・看板といった人間関係中心の政治システム、そして「馴れ合い」を前提とした護送船団方式・談合といった非合理的な経済システムなど、ムラ社会的な人間関係を基盤にした「もたれ合い社会」の崩壊である〉と述べている。そして、開かれた社会システムの構築のためには、〈日本型社会システム特有の「仲良しクラブ」の清算であり、「私と公」の峻別であり、「自己責任」の確立である〉と結論している。つまり、目的と手段の取り違えは、「日本型社会システム」の本質であり、日本の伝統的継承的な美德のひとつと考えられている「和」がもたらしたものである。

システムは、立ち上げた者がいつのまにか消えてし

まっているひとつの体系である。したがって、システムで動く社会は、舵取りを不要とするひとつの体制である。このように、政治がシステムのなかに取り込まれており、政治がシステムそのものである。

「和」は、異論を排斥し、議論を生む土壌を形成せず、組織や班を統合するにいたる、システムの所産である。〈人々が価値の制度化をおし進めていけば必ず、物質的な環境汚染、社会の分極化、および人々の心理的不能化をもたらす〉と、イヴァン・イリッチが『脱学校化の社会』のなかで述べている。「価値の制度化」を推し進めているのが学校教育ならば、学校こそ諸悪の根源であろう。学校価値が社会を覆ってしまうことをこそ、反転しなければならぬ。必要な研究は、〈今の未来学を逆転させたような研究〉だとイリッチは言う。それは、公益学がそうであるところの、〈ヒト・ココロ〉本位の時代を未来から投影する学問と言える。

五、学校価値という逆説

子供たちの私語や立ち歩きで授業が成立しない「学級崩壊」。酒瓶をもちこみ、式辞をきかず、携帯電話の着信音が鳴り響く成人式の崩壊。言った言わないの幼稚なやりとりで議論が成立しない国会の崩壊。この国に象徴的な出来事は、制度やシステムそれ自体の疲労と空洞化である。

不登校の子供たちが学校を嫌う理由は、千差万別であるという。しかし、学校が子供たちを長時間にわたって押し込める場ではなく、教室が個性を殺し合う空間でないならば、同じように学校は拒否されるだろうか。成人し健全なる社会へ巣立つべく祝福される集会であったり、数合わせや足し算によるのではなく論議が深まりゆく議会であるならば、成人式や国会の空洞化が防ぎうるかもしれないように。

学級の人数を減らせば、問題が解決するのではない。一人ひとりに目が行き届き、教室空間へつなぎとめる力

が増せば、学級崩壊や不登校がある程度、解消できるかもしれない。しかしながら、それを教育における改革と考えてはいけない。

〈異質な集団〉編成がカギ」という見出しのもとに、少人数指導のメリットは〈異質な考え方や、物の見方とじっくり相互交渉できるところ〉⁹⁾と日本教育新聞社社説は論じている。子供同士の親密なかかわりあいには、みんなと同じにすることで生まれるのではない。いい子供りっこ、悪い子供りっここの自己演出がますます強要されるならば、学級はないほうがいい。真に知識創造を活性化する場となり、他者とは異なる個人の特性が発揮される学級を創ること。それを少人数学級にする理由としなければいけない。

「学校」は、ギリシャ語では、スコレー (SCHOLÉ) といい、①暇、余暇。②暇な時間に行われること——論議、討議、集会、学校、の意だったらしい。また、ラテン語では、スコラ (SCHOLA) といい、①講義、討論。②学校という意味だった。それが、現在の英語のスクール (SCHOOL) となり、ドイツ語でのシュューレ (SCHULE)

となつた。ところが、学校には今、暇があり、討論があると言えるのか。

鳥羽欽一郎教授が提言した〈日本型社会システム特有の「仲良しクラブ」の清算〉、〈「私と公」の峻別〉、〈「自己責任」の確立〉は教育改革と結びつくように思われる。会社人間に象徴される日本社会の組織埋没的体質は、学校教育によつて生成されてきたふしがあるからだ。たとえば、授業に部活動にと励むよう指導することで、自分で考え行動する生徒たちが真に育成されているのか。調和を重んじ、校則を守らせ、一緒に行動することを教えることで、束縛と忍耐の集団訓練以外にどんな機能を果たしているのか。

学校に起こりうる具体例をふたつ。たとえば、学校教育における遠足。そこで見出されるのは、集団のなかで甘える子供たちの姿である——三列や四列にもなる。ペットボトルを道端に捨てて。地べたに座り込む。嬌声をあげる。また、最も遅れを取った女子や男子のグループは、歩く能力がありながら歩く意欲のない生徒たちであるということが判明する。バスのなかでは顔や手を窓

から出して、引率者が運転手に叱られる。これらは、個人や小人数のグループでは行われない行動であり、集団という「甘えの構造」のなかで醸成されている行動である。

これは、二〇〇一年十月から十一月にかけて雪印元部長ら五人が狂牛病対策を悪用して約二億円をだまし取つたとされる悪事と共通点がある。丸紅畜産、スターゼン、全農チキンフーズなどによる食品偽装表示事件は、会社ぐるみの犯行であることが特徴的であり、組織という「甘えの構造」のなかで醸成されているところは、児童生徒の集団における「甘えの構造」に等しい。

〈日本には集団から独立した個人の自由が確立されていない¹⁰⁾〉と土居健郎が『甘えの構造』で述べるように、学校教育には二つの問題が潜んでいる。ひとつは、集団のなかに生徒を育成しようとしていること。そしてもうひとつは、集団のなかで生徒たちが悪ふざけをしているということである。集団のなかに個が溶け込んだところには、責任を取る自己の存在はなく、自己決定を促す機会をも与えられてはいない。

次にたとえば、学校祭——クラス企画では、発案する者はいない。やっと役割分担が決められても、それにしたがって行動しようとする者がいない。本来、生徒たちが自主的自発的に企画し運営する「楽しい行事」が、「やらせられる行事」になっており、そもそも、だれ一人望んでいる行事ではないということが判明する。つまるところ、担任が責任を取って企画運営を行う破目になる。学校祭は自発的で積極的な意欲が熟成するまで待つべき行事であり、失敗をも教訓にするべき機会であるが、ここに現れる問題は、学校行事でさえ参加の有無が自分の意志で選択しうる西欧とは異なり、楽しい行事でさえ参加が強制されていることである。楽しみを餌にして個を集団へとからめとり、自己責任・自己決定をうやむやにしてしまうやり方が、学校教育の深層に潜んでいる。

学校行事とは異なり、学校生活の根幹を支えるはずの授業における無気力（アパシー）は、さらに深刻な問題である。教科書を持つてこない。持つて来ても、指示されるまで取り出さず、開きもしない。はなから学習するつもりがない。私語が教室の雰囲気壊してしまう。

つまり、意欲を喚起する手立てのことごとくが虚しい。ここに現れる問題は、授業が集団による一斉授業という形態を取っていることであり、学習が自主的自発的な意志によつていないことである。

生徒と教師のラポール（信頼関係）が崩れてきていることもまた、問題である。教師による一方的な管理や押しつけによる指導に生徒は耳を貸さないが、頭髪・服装指導における強制的な指導は信頼関係を大幅に損ねる原因になっていると思われる。学校週五日制が導入された二〇〇二年度より、「家庭——地域——学校」の三者の連携・プレーとその教育の役割分担が検討されねばならないが、髪型・服装・しつけなどは、〈教育の原点は家庭であることを自覚する〉という『教育改革国民会議報告——教育を変える一七の提案』のなかにもあるように、家庭教育でなされるべきものである。茶髪・ピアスのみならず、はなはだしきは喫煙さえ親が容認している状況にあつて、学校のなすべきことには限界がある。むしろ髪型・服装・しつけなど家庭が行うべきことに、学校は口出しをしないといった姿勢さえ必要であると考えられ

る。しかしながら、実態はほど遠い。家庭と地域が教育を学校に任せている状況があり、家庭教育・地域教育にも学校的価値が及んでいるからだ。

学校は、システム同様、立ち上げた者がいつのまにか消えてしまっているひとつの体系である。したがって、学校価値によって推進される教育は、舵取りを不要とするひとつの体制のなかに取り込まれている。つまり、学校教育が異論を排除するシステムに保護されている。

六、システムの自己目的化

目的と手段の取り違えは、教育における儀式のあり方に象徴的に現れている。始業式・終業式はおろか卒業・入学式ですら、欧米には日本のようなものは見当たらないが、儀式と学校教育が融合してしまっているところに、システムの病根が見て取れる。

たとえば卒業式。

まず、卒業祝賀会の準備がある。その日のために、実行委員会が組織され、実は毎年同じような中身になるこ

とが多いのだが、何回か企画運営会議をもったあとで、組ごとにアトラクションを行うよう指示したり、教員にはスピーチのお願いなどを前もって行ったりする。

実行委員の仕事は念入りに仕組まれており、保護者および先生への案内状の送付、出欠確認とネームプレートの準備。会の次第や席次を記した祝賀会のしおりの作成。そして、当日の受付の業務と司会進行など、こと細かに役割が分担される。さて、卒業祝賀会の当日、型通りPTA会長や校長のあいさつがあつたあと、乾杯があつて懇談となる。

何かが欠けている。それは、卒業にあたつての主人公、つまり卒業生の存在である。

それでは、卒業式典それ自体はどうなのか。その前に、式の予行練習がある。返事の仕方やお礼の仕方、それに歌い方。代表者ともなれば、歩き方やお辞儀の仕方など、たくさんの作法を教えこまれる。お辞儀をする位置やお辞儀の角度なども重要だ。

卒業式とは卒業証書授与式のことであり、授与という一方の動きには上位下達の力が働いているが、前例と

慣行がさらに型通りの形式を強化する。形式化し固定化した儀式を執り行うには、マニュアルに従うことが必要となる。決められたことから逸脱することは許されない。

また、慣例となつている形式を間違えないで行うためには、練習を重ねなければならない。予行ではうまくいっても、本番ではミスを犯すこともあるからだ。失敗は怖い。理想の形態がすでに描かれてしまつていたので、それに合わないと恥ずかしい思いをすることになる。こうして、予行練習での行いをなぞることが、式当日の行動となる。何かがおかしい。たとえば、来賓や恩師へのお辞儀には、真に敬う気持ちがこめられることになるのか。すべてが仕組まれたあとで、自発的な情動や真の心が生まれると言えるのか。

形式的で心のこもらないあいさつはいらぬ。形式的に動くマニュアル人間もいらぬ。今の世の中に求められているのは、ものを考えることなく集団に埋没する児童や生徒の育成ではなく、自ら考えることができる心あたたかい児童の育成であり、主体性があり責任感がある生徒の育成であるというのに。

手段が目的となつてゐる。卒業祝賀会も卒業式もそれ自体が目的と化して、すでにそれらは何のために行うのが判然としなくなつており、ただ朦朧とした雰囲気の中で酔うためのショーにすぎない。内容より形式が重んじられ、統率され仕組まれた芝居のなかにひとを陥れながら、慣行的行事は、揺るぎないシステムを構築してゆく。そして、システムそれ自体が現状を維持する方向へと突き進むだろう。変だと思つてもチェック機能はない。むしろ変だと思ふことを許さない力を、システムは備えている。手段と目的の取り違へは、システムが内包する真の目的から目をそらせることに貢献する。

このように、責任を個人からある種の仕組みやしきたりに転嫁させてゆくならば、社会は退歩してゆくにちがいない。人間が主体的に働く社会ではなく、人間がシステムによつて動かされる社会がここにある。それは、形式が内容に優先する社会であり、手段が目的と化した社会であり、主客が転倒した社会であり、価値の制度化が行われた社会、すなわちシステムの自己目的化が完成した社会である。

七、理念の空洞化

「二十一世紀を展望した我が国の教育の在り方」について、第十五期中央教育審議会が提出した一九九六年七月の第一次答申の内容が今でもまぶしい。たとえば、次のような一節——〈経済成長を追い求め続けてきた結果、いつも何かに追いついていられているような余裕のない生活を送り、また、豊かさを実現したといっても、物質的な豊かさが中心で、あふれるモノに取り囲まれながら、何かしら満たされぬ思いが募る毎日を送っている。このような中で、国民は次第に「ゆとり」や心の豊かさなど多様な価値や自己実現を求めるようになってきている。今日、我々は、これまでの過去を立ち止まって振り返りながら、経済成長の過程で失ったものは何か、今後、我々が本当に求めるものは何であるかを考えてみなければならぬ〉。

まぶしいのは、提言のどれもが手つかずにあることであり、今後とも具現化されることはないだろうという絶望

の輝きである。（上に改革あれば、下に対策あり）ということが明白になってしまった以上、ここで述べられている理念は実現されずに輝きつづけるだろう。建築においてそうであるように、建前は、すこぶる重要であるはずなのに、見事なまでに骨抜きにされてゆく。答申は建前で、現実における実践が大切な本音であるからだ。

我々が心の「ゆとり」を持つことを妨げているもののひとつとして、答申は「他人がしているから自分もする」といった横並び的な意識をあげている。また、「いじめ・登校拒否の問題」では、大人の側の「同質にとらわれる社会」の影響を指摘していることに注目したい。つまり大人社会が「個性を尊重し、お互いの差異を認め合うこと」をしてこなかったのではないか、というのである。

先行き不透明な時代にあつて今後、子供たちに求められるのは、いかに社会が変化しようと、自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力であり、また、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や

感動する心など、豊かな人間性である」という。

これからの学校教育は、〈生涯学習を見据えつつ、学校ですべての教育を完結するという考え方を採らずに、自ら学び、自ら考える力などの【生きる力】という生涯学習の基礎的な資質の育成〉を重視する一方、家庭は〈本来、果たすべき役割〉を見つめ直す必要があると訴える。具体的には〈基本的な生活習慣・生活能力、豊かな情操、他人に対する思いやり、善悪の判断などの基本的な倫理観、社会的なマナー、自制心や自立心〉など【生きる力】の基礎的な資質や能力の養成である。そして、〈家庭教育の条件整備の第二〉として、〈まず、家族がそろって一緒に過ごす時間を多く持ち、一緒に生活や活動をすることができるよう環境を整える〉ことが重要であるとしている。

第二土曜日を休日にした一九九二年九月から「学校週五日制」への移行がなされているはずなのに、今なお土曜も日曜も部活動があり、長期休暇には補習や合宿がある。【学校のスリム化】の理念は現場には関係ない。舵取りが存在しない以上、理念があってもどうにもならない

からだ。この国が、「時代を超えて変わらない価値のあるもの（不易）」と「時代の変化とともに変えていく必要があるもの（流行）」が何であるのかを見失い、漂いつづけているのもそのせいである。たとえば、「豊かさ」といい「ゆとり」といい、その内実をこの国は知らない。言葉があるだけである。なぜか。

ハンガリーという国に、次のようなクラシックコンサートがあったという——バイオリンは垂直に固定され、トランペットは支え棒に支えられ、ティンパニの撥にはバネが入っており、ステージに設定された楽器の異様に圧倒されるといったような——。それは、身体障害者が演奏するコンサートであった。ひるがえって、日本では、身体障害者のためには、一流の楽団を招き、一流の演奏を聴かせたりしている。どちらが、身体障害者にとつては優しい国であり、どちらが豊かな国なのか。

両者の活動の相違は、能動的で伸びやかな発信的活動と、受動的で鑑賞するだけの受信的活動であると、まず指摘することができる。「寝たきり老人」という言葉があるように、日本で介護と言えば、介護人からの介護を受

け容れる形態に近いが、それは「寝かせきり」の介護と言える。しかしながら、外界に連れ出して「寝たきり」にさせず、伸びやかに能動的に活動させる介護が、欧米にはある。能動的な活動であるか受動的な活動であるかの違いに、豊かさのバロメーターは設定しうる。

他者への基本的な配慮は、能動であれ受動であれ選択肢が豊かにあることであり、選択しうる自由や選択しなぐともいい自由があることである。「豊かさ」に自明の定義はない。それは個人の生き方や価値観に依っており、定義しうる自由にこそ「豊かさ」はあると言える。国は富んでいるのに、国民は貧しい。「豊かな国の貧しい心」という表現で、それは揶揄されてきたのではなかったか。

学校文化というものがあるならば、日本のそれは豊かであると言えるのか。文化祭、運動会、修学旅行などの学校行事に、選択しうる自由や選択しない自由はあるのか。活動が制約されているばかりではない。集団において自己と他者がわかりあえるという幻想が、これまでの学校文化に染みとおっていたのではないか。わかりあえるという前提のもとで、たったひとつの価値観（学校価

値）が信奉されてきたのではなかったか。自己と他者は決定的に異なっている。むしろ、お互いがわかりあえないという絶望から出発することからしか、希望は生まれない。均質な個人が寄り集まった集団というものはありえない。あるとすれば、それは統制され仕組まれている可能性がある。

異なる価値観を認め多様性を肯定していくには、どうしたらいいのか。しかしながら、その問いを考える前に、ふたたび「豊かさとは何か」を問い直さねばならないのは、この国の人々が真に「豊かさ」を求めているのだから、この国の人々の存在に突き当たるところである。つまり、「豊かさ」や「ゆとり」を許さぬ要因が存在していると、仮説することができると。たとえば、〈家族がそろって一緒に過ごす〉ことの大切さをわざわざ提言する以上、それを妨げる要因があるということだ。その実体を捉えなくして、対処の方法はない。それは、中教審答申を骨抜きにするような何ものである。それは、実体のないもの、すなわち雰囲気のようなものとしか考えられない。

「教育改革」という名で目論まれている改革には、二通

りの内実があるように思われる。ひとつは、理念としての改革。中教審答申はこれにあたり、「建前」と言っている。もうひとつは、現場における改革。学校における改革案は、学校価値に基づいて立てられると言っている。理念主義と現場主義というふたつの「教育改革」が存在するならば、摩擦が生じるのは当然である。学校は上からの「教育改革」を迎え撃っており、現場は理念に対抗しているように思われる。たとえば、〈家庭——地域——学校——〉という三者のロールプレいの重視が唱えられるにもかかわらず、学校は教育における既得権を手放しはしない。たとえば、児童生徒が万引きしても、それを指導するのは親ではなく学校であり、適切な指導者がいないにもかかわらず、部活動を指導するのは学校の教員である。そこに垣間見られるのは、守り通すように仕組まれたシステムの実体であり、「建前」を反故にする隠された「本音」である。

現場における「教育改革」は、したがって、システムの中で繰り広げられるならば、その進行方向は常に逆である。改革と名づけられるものすべてがシステムを補強

するように働くからだ。科学技術ばかりではない。進展が退歩である現象がここにもある。教育を糺さねばならないのに、「教育改革」は教育を遠ざけてしまっている。

企業も官僚制も子供たちのありようも頹廢の一途を辿っているのに、なす術がない。それは変えようとしても変える主体、あるいは変えうる個人が存在しないからだ。あるのは、組織であり、集団であり、システムであり、システムは自らを変えることなど夢にも思わない。つまり、構造そのものではなく個人が存在しないような国に、そもそも「構造改革」などはない。システムの病弊は、直接的には官僚の無責任によるとしても、間接的には人間を無能化せしめる構造によるものであり、それこそ長い年月にわたって人を教養育てる営為、すなわち教育によつて構築されてきたものではなかったか。

教育が学校に収斂されるシステムで動いているならば、この国に教育改革などというものはない。あらわになるのは改革理念と現状とのねじれであり、生成されるのはシステムに従う人間とそれにはじかれゆく人間の分別である。なすべきことは、したがって、理念としての教育

改革の実行であり、現場における制度修復としての教育改革ではない。

中教審答申は、教育を展望する優れた理念を包括している。しかしながら、答申にもある言葉を用いれば、改革案は〈画に描いた餅〉である。理念は実行が約束されていない。むしろ、実行が果たされない可能性が濃厚な答申であり、提言というレベルにとどまっている。改革とは、したがって、単なる教育の改革のことではない。改革は理念を空洞化するシステムをこそ対象とし、理念が具現化する社会の実現をこそ目指さなければならない。

八、公益理念の導入

学校は子供たちの自発的な活動がそのなかで営まれる小社会であるべきだとデューイは考えたが、社会が複雑化するにつれ、今や実社会から隔離され純粹培養された学校という無菌の社会から子供を解放する方策もまた必要である。校外での子供の生活について学校は本人と家庭の責任に任せ、ボランティア活動や労働体験を自由に

行わせることが望ましい。そうでなくして、学校という箱のなかだけで真の社会性や社会力などといったものが育つとは思えない。交通ルール違反や万引きといった反社会的行動や非社会的行動があとを絶たないのが現状であり、インターネットやメールに自由にさらされる社会にあつてはメディア・リテラシー（情報を主体的に読み解く能力）を体得させる必要性もまた起こっている。

「今後の教育に何が必要か」という見出しのもとに、堺屋太一は〈生意気な子を尊重して^①〉と語っている。一見ささやかなその主張には、二〇〇二年度から施行された「学校五日制」「三割減学習指導要領」「少人数学級」など、どれを取ってもいまだ日本が経験したことのない教育における大改革に、勝るとも劣らない改革理念が潜んでいるように思われる。

〈規格大量生産社会を前提とした教育が昭和のはじめからずっと続いてきた^②〉のであれば、生意気な子を育てるなどということは、まったくの方向転換のように思える。教育制度の改革は表層で行われる建前であり、深層に変わることのないシステムがあつたのだとすれば、そ

れによって児童生徒がプロイラーのように飼いならされてきたと考えるのは、ゆえなきことではない。

「いまや一人ひとりの独創力や感性が問われる『知価社会』となり、他人といかに違うのかというのが求められるようになった¹³」と堺屋太一は述べる。しかしながら、例外なく全員に同じ服装を着させる制服制度を堅持し、個性的な趣味嗜好の茶髪・ピアスを禁止し、学校行事に全員を結集させようとする力が学校に働いているかぎり、事態は絶望的である。

服従や統制によって子供たちの心が育つのではない。排除すべき旧来の価値を、学校が情性的に遵守してしまっている。壊して造るといふ「スクラップ・アンド・ビルド」という発想が、学校には育たなかった。反抗的で生意気な生徒を育てるといふ改革の夢は、今ある学校システムの逆説そのもののように浮かび上がってくる。

生徒たちがいかに教師に従順であるかを競う場であることを学校がやめること、言い換えれば、「一律主義を改め、個性を伸ばす教育システムを導入する」（『教育改革国民会議報告』）ことなしに、改革はない。しかしながら、

残念なことに、この国は「個性」という語の内実を知らない。繰り返して述べてきたように、人間ではなくシステムが社会を構築しているからであり、他とは違った特有の性質・性格を認める磁場が、制度を基盤とした組織体のどこにもないからだ。

小松隆二著『公益学のすすめ』によれば、公益活動には〈ニーズ〉〈サービス〉〈ソーシャル〉という三つのキーワードがあるという。そして、教育とは公益の視点を導入するに値する理念である。

教育そのものは、きわめて公益性の強いものである。教育を受け、学習する生徒・学生などの人間性、状況、立場を可能な限り尊重すること、その上で一人ひとりの個性や良さを発見し、育成することが教育の基本といつてよい。この学生と教員・学校の本来の関係は、ニーズとサービスを媒介にした、まさにソーシャルな公益関係そのものである¹⁴。

主体者の〈ニーズ〉に叶う〈サービス〉が制度によつ

て提供され、それが〈ソーシャルな関係〉と認められるところに、教育が成立すると言える。ところが、これまで教育は、社会の〈ニーズ〉に叶う〈サービス〉が学校によつて提供され、それが〈ソーシャルな関係〉と認められてきたことで成立していたのではなかったか。しかしながら、もはや社会は寛容した。

学校教育が教育である、というのは幻想である。学校がつぶれても人間がつぶれない仕組みを教育が保有することこそ、公益と言える。しかしながら、教育が危機に陥っている。それは、本来的な〈生徒と学校の関係〉が崩れているからだ。いわば、学校の〈ニーズ〉に叶う〈サービス〉が制度によつて生徒に提供され、それが〈ソーシャルな関係〉であるときなされてきたからだ。学校に公益の視点を導入するとすれば、現状こそがひっくり返らねばならない。

日本社会は、立ち上げた者がいつのまにか消えてしまっているひとつの体系である。社会がシステムそのものであり、人間はシステムの管理者（アドミニストレーター）でさえシステムに支配されていると言える。

近代的な秩序とは、異質な個性を持つものが自由に活動を認められて、なおかつルールが保たれる状態のことである。上から型・枠・姿勢をきめてその枠におさめたり、抑制や強制をしたり、ましてや権力を行使したりして保たれる秩序は、近代的な秩序とはいえない。むしろ公益に反するものである¹⁵。

『公益学のすすめ』に表わされたこの公益理念は、学校教育というシステムに投射されねばならない。すなわち、学校という制度疲労にひとは敏感であらねばならない。学校によつて制度化された社会にとつて、実現しうる唯一の改革は学校価値の見直しであり、今ある学校の解体であるからだ。教育が学校によつて生成されることの危うさを知り、社会が教育によつて生成されてきた歴史の不条理をひとは学ばねばならない。公益がシステムではなく人間のために働くように社会を立ち上げることにこそ望ましい未来がある。

九、創造し進展しうる社会の実現

私たちは地球という惑星に生息している。自然と共生し、寄り添って生活を営む社会を構築せずして、生き延びる術はない。社会は普遍的な価値を有してそこにあるわけではない。それは変わりうるものであり、澱みなく流れる水のようなものである。言い換えれば、栄養を補給しつづけなければ死んでしまう人間の肉体のように、時代の移り代わりとともにつねに新たな価値を付与していかなければ澱んでしまう共同体としてのありようが、社会である。社会のために人間がいるのではない。同じように、学校のために人間がいるのではない。人間が価値を創造していくところに社会が立ち現れてくる。したがって、どんな社会が望ましいかを問わずして、現状認識はありえず改革もない。

問題がなければ、解決はない。バブル経済破綻後の「失われた十年」、野放しにされていたのは、問題意識の欠如による慣例主義の惰性的行使であり、問題の先送り

であった。それは、現状維持の姿勢を生み出し、無関心の態度を作りあげてゆく。学校教育がそれを培ってきたことをこそ問題としなければならない。

社会があるという自明性に寄りかかつてはいけない。同じように、学校もまた。それは作りあげていかねばならないものであり、その意志のないところで社会は腐敗する。画一的な横並びの発想を捨て、新たな価値の創造へと向かわなければ、未来はない。創造し進展しうる社会実現への志向は、教育をもつてするほかにはないと言える。

成熟した社会にあつては、もはや進歩というものはない。むしろ、これまで進んできたコースの変更を画策し、新たなパラダイムの構築をこそ志向しなければならない。未踏の世界への企投こそが前進であり、進展でありうる。なすべきことは、機能体が機能化しうるシステムへの移行であり、理念を空洞化するシステムの排除、すなわち仲良し集団・もたれ合い社会の解体である。そのために重要なことは、議論を成立させ、真の「和」を実現させ、説明責任の中枢を政治行政にあらしめることである。教

育が帯びている使命は大きい。これまでの既成価値を遵守してしまうことなく、学校中心の教育を改めること、さらには学校価値そのものを見直すこと、すなわち今ある学校を解体し、新たな学校という枠組みを構築してゆくことこそが、社会の新生につながりうる。

注

- (1) ジェレミー・リフキン（竹内均訳）『エントロピーの法則』祥伝社、一九八〇年、一一〇頁。
- (2) 同右、一一〇頁。
- (3) 同右、一一一頁。
- (4) 養老孟司「共同体化は国民の性癖」『毎日新聞』二〇〇一年八月十九日。
- (5) 鳥羽欽一郎「日本型社会システムの崩壊」『産経新聞』平成十一年五月三日
- (6) 同右
- (7) イヴァン・イリツチ（東洋・小澤周三訳）『脱学校化の社会』東京創元社、一九七一年、一四頁
- (8) 同右、一四頁
- (9) 日本教育新聞社説「少人数指導」『日本教育新聞』、二〇〇

〇一年八月二十四日

- (10) 土居健郎『甘えの構造』弘文堂、一九七一年、四一頁
- (11) 堺屋太一「今後の教育に何が必要か」『日本教育新聞』二〇〇二年一月十一日
- (12) 同右
- (13) 同右
- (14) 小松隆二『公益学のすすめ』慶應義塾大学出版会株式会社、二〇〇〇年、二〇二頁
- (15) 同右、六七、六八頁

参考文献

- 小松隆二『公益学のすすめ』慶應義塾大学出版会株式会社、二〇〇〇年。
- ジェレミー・リフキン（竹内均訳）『エントロピーの法則』祥伝社、一九八〇年。
- イヴァン・イリツチ（東洋・小澤周三訳）『脱学校化の社会』東京創元社、一九七一年。
- 土居健郎『甘えの構造』弘文堂、一九七一年。
- 教育改革国民会議「教育改革国民会議報告」内閣官房・内閣官房副長官補室、二〇〇〇年。
- 文部広報「第十五期中央教育審議会第一次答申」文部省大臣官房、一九九六年。
- ジョン・デューイ（宮原誠一訳）『学校と社会』岩波書店、一

九五七年。

カレル・ヴァン・ウオルフレン（篠原勝訳）『人間を幸福にしない日本というシステム』毎日新聞社、一九九四年。